リリカルマジカルハードモード

煉瓦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルマジカルハードモード

【Ｎコード】

Ｎ３３１８ＢＡ

【作者名】

煉瓦

【あらすじ】

魔法少女リリカルなのはとか言う世界に転生させられた俺。女神に告白されるし敵は魔法少女ものとは思えないぐらい強いし姉は過保護？だし……。俺はこれからどうなるの！？

プロローグ　気がついたら女神に告白されていました（前書き）

つい衝動的に書いてしまった
これからは両方更新していこうと思う。

プロローグ　気がついたら女神に告白されていました

気がついたら知らない天井だった。
テンプレか……

「君、失礼な事考えたよね今」

目の前には金髪の女性が、所謂女神だと思うがいた。

「まあ、いいわ。分かってると思うけどここ死後の世界みたいなものだから」

神のミスってやつか？

「はあ？　神様がそんな簡単にミスするとでも思ってるわけ？　バカなの？」

ちょっとイラッと来た。
じゃあ、なんなんだよ？

「そんな事もわからないの？　普通に事故死して来たに決まってるじゃない」

どうやらこれが普通らしい。

「まあ、あんたは特別だけど！」

特別なんかい！
じゃあ、俺はこれからどうなるんだ？

「テンプレに転生してもらうわ！　暇だから！」

やっぱりテンプレかい！

「まあ、あなた以外にも何人か前にミスって殺しちゃった人よんだけどね。テヘッ☆」

テヘッ☆じゃねーよ。やっぱりミス多いんじゃねーか。

「まあ、特典寄越せとか煩かったから虫になれる能力とか、女性の下着を被ったら強くなる能力とか適当にあげたけど。貴方もいる？」

そんな変な能力いらねーよ！

「まあ、なんて無欲な人間。うん。顔とか好みだから色々強いのあげちゃう。あ、私の処女とかもいる？」

いらないよ！？　急に何言い出すんだよ！

「ケチ。ヘタレ。童貞。男好き」

最後のは否定させてもらおうか！？

「私貴方に恋しちゃったの。好き。抱いて！」

そう言うと女神は急に抱きついて来た。

まあ、華麗に避けるんですがね。

「キャウン。痛い……」

いきなり何だよ。

「昔から好きでした！」

いや今知り合ったばかりだし！

「酷い、私はこんなに想ってるのに……」

知らんがな。

それよりも特典とかいらないんだが。

「え、もう移し終えたけど……」

はあ？　いつだよ！？

「うーん。処女貰ってぐらいから？」

速攻で終わらしてますね！

「まあまあそう怒らずに。そうだ特典の説明してあげる」

まあ、貰ったからには説明を受けておくよ。

「じゃあ、その1。まず君が行く世界は魔法少女リリカルなのはって世界だから、ミッドの魔法とベルカの魔法を使える様にしといたよ」

リリカルなのは？　あんまり知らないな。高町なのはってのが魔王でフェイトが百合。はやてがおっぱい魔神でシグナムがニート侍で

ヴィータがエターナルロリータぐらいしか知らないな。
あれ、以外と知ってる？

「うん。色々と間違ってるね。じゃあその2。直感力みたいなのが優れてる。だから武器とかも直感的に操れる！」

へぇ。まともだな。

「その3。魔力変換素質「風」。ちなみに風は持ってる人とかいないから「炎熱」とか「電気」みたいに名前が無いんだよね。颶風とか狂飆とかでも好きに呼んで良いよ」

まあ、早い話が風を操れる力？

「じゃあ最後に、相手の技術を吸収し戦えば戦うほど強くなる」

あれ、意外とチートじゃ無い？

「だってチート過ぎると面白くないでしょ？」

面白い面白くないじゃ無いと思うけどな。

「あ、最後にこれをあげる」

そう言って渡して来たのは鎖だった。

「それはね。インテリジェントデバイスって言って魔法の補助装置みたいなものだよ。ちなみに長さとか大きさ変えられるから」

へー。

「ちなみにインテリジェントデバイスには意思が宿ってるんだけどその意思私だから」

は？　どういう事？

「私はここを離れちゃいけないからね。その鎖に私と通信出来る機能をつけてついでに向こうの世界でインテリジェントデバイスって呼ばれてる物みたいに改造しただけだよ。貴方と片時も離れたく無いから！」

あれか、簡単に言ったら向こうの世界ではインテリジェントデバイスって呼ばれてるけど実は魔法補助してくれる女神か。

「そんなところ。まあ携帯電話みたいな感じ！　ちなみに起動時は色んな武器になるよ。あと名前は私の本名のレイシスだから。気軽にレイって呼んで！」

はぁ、面倒だ。

「さあ、転生したらなにする？　私一応ここから離れちゃいけないけど、その鎖があったら貴方のもとにひとっ飛び出来るよ！」

ひとっ飛びして何する気だよ。

「え、もう……そんな事言わせないでよ……」

ダメだこいつ。早くなんとかしないと。

「あ、ちなみに他の転生者とかには気をつけてね。何人か強めの能

力持ってったから」

いや、渡したのはお前だろ！？

「気にしない気にしない。さあ、新しい人生を楽しみなさい！」

そう言って俺の足元に黒い穴が開き落とされた。

最後までテンプレだなおい。

プロローグ　気がついたら女神に告白されていました（後書き）

てなわけで新連載。
一応もうひとつの方もこれからは更新頻度が上がると思うよ！
ハードモードとか言いながらハードなのはまだ結構先と言う……
あと、間違った原作知識とかは作者にも言えることだと思うから覚えといてね！
てなわけでこれからよろしくね！

第1話　姉がブラコン過ぎて困る

こんにちは、転生させられた火花紅次（ひばなこうじ）だ。
ちなみに紅次ってのは俺の名前な。
しかし赤ちゃんからやり直しはやっぱり恥ずかしいな。
まあ、肉体に引っ張られたのか当時はそこまで羞恥心が無かったが……

今は4歳だ。一つ上の姉がいるんだが……俺の事を愚弟とかよぶくせにブラコンだ。
風呂は絶対に一緒で寝る時も一緒。常に俺をそばに置いておかなければ落ち着かないらしい。

「あやねえなにしてるの？」

ちなみにあやねえとは姉の事だ。彩花（あやか）だからあやねえ。

「そんな事もわからないの？　今貴方のアルバムを整理しているところよ」

手元を覗きこめば確かに俺の写真や俺とあやねえが写った写真がズラリと並べられている。
ちなみにこれでアルバムは10冊めになる。

俺は身の危険を感じあやねえからそっと離れる。
幸い姉は写真を見てキャーキャー言っているから暫く気付かないだろう。

俺の父と母は管理局とかいうところで働いている。
それなりに偉いのかあまり家に帰ってこない。
だからあやねえはブラコンになったのかもしれない。

今更だが俺とあやねえの見た目を軽く説明しよう。
俺は紅い髪の毛を適当に伸ばしている。今は軽く肩にかかるぐらいだ。瞳も紅く目つきが悪くよく人に誤解されやすい。

あやねえは俺と同じ色の髪を腰辺りまで伸ばしていて綺麗だ。
瞳も俺と同じで紅い。
けどあやねえは周りに優等生として見られている。実態はブラコンなのに。

ちなみに三歳ぐらいの時に鎖のデバイス？レイシスが首に架かっていた。
あの時はあやねえが「愚弟が不良になった！」とうるさかったな。

さて、現実逃避はやめようか。

「あやねえなにしてるの？」

現在あやねえに腕を掴まれて身動きが出来ません。
てか、気づかれないように離れたのに掴まれるとは。

「どこに行こうとしてたのかな？」

「ちょっとトイレに」

「なら、私も一緒に行くわ」

「あ、もうだいじょうぶかも！」

なぜトイレまでついて来ようとする。

「そう。じゃあこの賢姉と一緒にアルバムを見ましょう」

そう言って後ろから抱きしめて座らされる。
これじゃあ逃げられん。

アルバムって過去の恥ずかしいの見なくちゃいけないから嫌いなんだよな。
とか思いながら2時間ぐらいアルバムを見続けていた。

あやねえ。俺が知らない写真がいっぱいあるよ。まさか盗撮？
きっと将来あやねえは変態になると思う。

第2話　地球進出

今日父さんと母さんが死んだ。
任務中に死んだようだ。
俺としてはあまり実感がなかった。あまり一緒にいなかったから。
しかしたまに顔を合わせた時は目一杯可愛がってくれる良き両親だった。

さて、今は家にいるのだが困った事になった。
現在俺は4歳あやねえは5歳だ。
つまり後継人みたいなのがいるのだが……。あやねえが周りの大人を威嚇して話が進みません。
どうやらうちの両親は管理局内でもそれなりに階級が高くて金を持っていた様だ。
当然保険金の様な物が凄い額になる。
前世の頃なら一生働かないでも暮らせるぐらいには金があった。
そんな訳で管理局の金の亡者が群がって来た。

「あんたはここでジッとしてなさい」
そう言って俺を別室へと待機させる。
「あやねえ？」
「大丈夫よ。あんたの事は私が守ってあげるから」

そしてあやねえは大人達がいる部屋へと戻って行った。

「なあ、レイ。どうにかならないのか？」

俺は首に架けている鎖のデバイス、レイに話しかける。

『んー。最善策としては一番マシな人を探すとかかな。けどそんな人いなかったしなー』

使えない駄デバイスな女神（笑）だな。

『む。じゃあいいですよ。今からそっちに現界して保護してあげますから！』

「やめろ。それでも神様かよ」

『神様と女神はちがうんですー』

「へえ、どこらへんが？」

『え、能力的な？』

自分でも分からんのかい。

解決策をあーだこーだ言い合っていたらいきなり扉が開いてあやねえが帰ってきた。

「あやねえ？」

あやねえは何処となく安堵の表情を浮かべている。

「こーちゃん。安心して、もう大丈夫だよ」

俺に抱きつきながらそう言ってくる。
ちなみにこーちゃんとは俺の事だ。
こうじだからこーちゃん。愚弟かあんた以外ではこう呼ばれている。
しかし大丈夫とはどういう意味だろうか。

「さっきグレアムのおじさんが来て私たちの後継人になってくれるって」

グレアムのおじさん。
本名ギル・グレアム。
地球出身の父さんと母さんと仲が良く、俺たち姉弟は良く使い魔の猫二匹と遊んでいた。
ちなみに俺とあやねえは地球に行った事が無い。

何はともあれ金の亡者の心配はしなくていいだろう。
グレアムのおじさんに任せれば大丈夫だろうし。

後日、俺たちは現在住んでいるミッドから管理外世界、地球に引っ越すことになった。
なんでももう一人面倒をみている子がいるらしくその子の隣に部屋を用意してくれたらしい。

グレアムのおじさんの使い魔、双子のリーゼロッテとリーゼアリアに手伝ってもらいながら準備を終える。

グレアムのおじさんとロッテとアリアに、見送ってもらいながら地球へと向かった。

そして、俺は地球で出会う事になる。
後のおっぱい魔神と呼ばれる存在と。

第3話　関西少女登場（前書き）

はやての話し方が難しかった……

同じ関西人なのになあ

第3話　関西少女登場

地球に来た俺たち姉弟は取り敢えずグレアムのおじさんが面倒を見ているという子のところに挨拶に来ていた。

「火花紅次です」

「姉の彩花よ」

「八神はやて言います。よろしゅうな～」

ｏｈ－、原作キャラとかいう奴じゃん。

目の前には茶色髪の女の子。足が不自由なのか車椅子に座っている。一応俺と同い年らしい。

「はぁー、おじさんに話は聞いてたけど、なんや嬉しいな。家族が増えたみたいで」

事前に聞いた話だとはやては昔に両親を亡くしたらしい。だから俺たちの存在とが嬉しいんだと。

「んふふ、はやて？　これからは私の事は姉と思いなさい。この賢姉が貴方を幸せにしてあげる！　だって家族ですもの！」

「お姉ちゃん？」

「ノンノンノン。あやねえ」

とりあえずお姉ちゃんではなくあやねえと呼ぶ様に進めてみる。
「あやねえ……うん。なんかこっちの方がしっくり来る」
それはあやねえと呼ばれて４年目だからな。

互いに自己紹介を終えてからは家に戻り一先ず荷解きをする。
とは言っても服や大事な物ぐらいしか持って来てない。
これはグレアムのおじさんが地球で買えばいい。と言ったからだ。
『ああ、地球という事はただでさえ少ないセリフが更に少なくなるんですね。わかります』
地球は魔法が無いからな。
しかしレイよ。そんな電波な発言は止めようぜ。
「愚弟ー。はやてがご飯一緒にしようって」
それは好都合。
皿とか食材が全く無いからな、助かる。
「今行くー」
俺はとりあえず返事をしてはやての家へと向かった。
「どう、かな？」

「うん。美味しいよ」

料理は普通にうまかった。
本当に４歳児か？
ちなみに俺は得意料理が卵焼きであやねえが卵かけご飯だ。
おい、それは料理じゃ無いとか言うな。あやねえに潰されるぞ！
ナニがとは言わないが……

「えへへ。良かった。これでも料理は得意やねんで」

確かに得意と言うだけはあった。
肉の焼き加減に野菜のシャキシャキ感の出し方。
スープも味わい深かった。

よし。これからははやてに料理を教わろう。

「それじゃあ、お風呂入ろか」

もう８時だ。良い子はもうすぐ寝る時間だな。

「じゃあ、はやて、愚弟行きましょうか」

え？　はやても？

「なぁに、その鳩が飛行中に豆鉄砲食らった様な顔は」

「いや、一応俺は男だし、はやては女の子だし」

俺はあやねえと何時も一緒に入ってるから慣れてるが、はやては流

石に恥ずかしいだろう。

「あら、けどはやては足が不自由なのよ？　なのに一人でお風呂に入れと？」

うっ、確かに。

「けど、それならあやねえとはやてだけで入れば」

「ふぅ、分かってないわね」

あやねえはやれやれと言った雰囲気で肩を竦める。

「そんな事したら私が弟の体を見れないじゃない！」

「お巡りさーん！　変態がいます！」

「私は変態じゃないわ。弟ＬＯＶＥなだけよ！」

なお悪いよ！

「ふふっ、あはははは！」

俺とあやねえが、言い合っているとはやてが突然笑出した。

「どうしたんだ？」

「いや、面白くてついな。仲ええ姉弟やなー」

「はやて……」

「ん？」

「お前もいずれこれぐらい仲が良くなるんだぞ？」

そう言うとはやては間抜けな表情を浮かべる。
おお、これがら鳩が飛行中に豆鉄砲を食らった表情か。

「んふふ。どういう事？　って顔してるわね。簡単よ。私達はもう姉妹なんですもの！」

そう。最初に会った時に言ったようにもう家族なのだから。
あれぐらいの掛け合いはこなしてもらわないと。

「そっか……そやな。うん！　ほな関西人の腕の見せ所やな！」

いや、別にギャグするわけじゃねーから！

「ほな、はよお風呂入ろかコウ！」

「ええ？　いいのかよ？」

「ふふん。家族やねんから遠慮はいらんやろ？」

あ、確かに。
これは一本取られたな。

「てか、コウって？」

「ん？　紅次やからコウ。うん、似合ってるで！」

あだ名みたいなのか。
まあ、ゆくゆくはおっぱい魔神とか呼ばれるんだしいいか。

「さて、じゃあ入るかね」

ああ、そういえばレイははやてがいたら喋れないから存在を忘れていたな。

ｓｉｄｅ　はやて

今日家にやって来たのは紅髪の姉弟やった。
グレアムおじさんが言うには両親が亡くなって引き取り手がおらんから引き取ったらしい。

紅髪の弟君は髪の毛はボサボサで目付きが鋭おてちょい怖かったけど話してみたらええ子やった。

お姉さんの方は髪の毛は良く手入れされてて目は意思の強そうな目やった。
同じ女の私からみても綺麗で尊敬した。

なんか家族が増えたみたいに感じて言ってみたらお姉さんが姉と思ってくれてええて。正直むっちゃ嬉しかった。

二人ともご飯作る為の食材がなさそうやから夕ご飯を作って上げた。
これでも昔から料理はしてたからな、自身はあるで。

うん。われながら上手く出来たと思う。
コウに美味しいって褒められたら嬉しかった。
今までは料理を誰かに振るうなんてせえへんかったから緊張したけどやったかいあったな。

ご飯が終わってさあ、お風呂って時にあやねえが皆で入るいいだした。
私は別に構わへんけどコウが凄い慌ててた。
そこから姉弟での漫才。二人の仲が凄お良くて笑ってもうた。
そしたらコウが急にお前もいずれこれぐらいしろよ。とか言い出した。
なんでやねん。
そしたら、二人が私はもう家族て……。
私が一番欲しかったもの。
二人ともありがとうな。

お風呂に入って今はベッドの中。
二人は布団も用意してなかった。
しょうがないから家族想いな私がベッドに入れて上げた。
三人は流石に狭いけど私は今までの一人やない夜に満足や。
あ、あやねえもう寝てもうた。

「なあ、はやて」

「ん？」

そろそろ寝よかなおもてたらコウが話しかけて来た。

「これからよろしくな」

「んーこちらこそ？」

私は足も不自由やしこっちがお世話になりそうやわ。

「ん、そうか。じゃあおやすみ」

眠りにつこうとしてるコウ。

私は今日の感謝と、これからも迷惑かけるやろからお礼として言っておく。

「大きくなったら結婚しよな」

「ヤダ」

……なんでやねん。

第3話　関西少女登場（後書き）

最初タイトルはおっぱい魔神登場！　とかだった。流石にタイトルがあれすぎたんで変えました

はやてが車椅子に乗ってるのっていつからだろう。
わからないからとりあえず４歳時には乗ってましたと捏造。
車椅子押せるか？

感想とかくれると嬉しいです。

第４話　小学校入学式！　俺は一年間大人しくしてよう

時が進むのは早い事に俺たちが地球に引っ越してから一年以上が経過した。

『流石に時間の経過が早過ぎると思うな』

レイが何か言っているが無視だ。
どうせこの先も暫く出番が無いんだし。

この一年色々あった。
アリアとロッテに魔法の特訓をして貰ったが、異常に強くて流石年の功と言って生死の境を彷徨ったり、あやねえが小学校に通いだし、俺との時間が減ると言って義務教育を廃止させようとしたり、レイがあまり構ってもらえないからとグレたりと色々とあった。

さてそんな訳で小学校に通う事になった。
……あやねえが義務教育を潰そうとしたの止めなければ良かったな。

「あぁ、良いわ。良いわよ愚弟！」

現在あやねえが俺の制服姿をカメラで３６０度全方位から撮っているところだ。
ちなみに制服は私立聖祥大学付属小学校の物だ。ちなみに長ズボンだからな。

「あやねえ。流石にもう行かないと遅刻するよ」

後３０分もしたら入学式が始まるだろう。

「あら、もうそんな時間かしら。続きは帰ってからね」

まだやるつもりか。

「二人とも、きーつけてな。車に引かれんようにな」

はやては足が不自由な為休学扱いだ。入学式にも出れないのは家族として心が痛む。

「コウ、そんな顔せんと笑ってーな」

ん？　顔に出てたか。

とりあえずはやてを安心させようと表情を和らげる。

「うん。相変わらず目つきは悪いけどさっきよりええ顔になったで」

「目つきが悪いのは余計だ」

「あら、そうこうしている間にもう後１５分しか無いわよ」

そう言われて時計を見ると確かに１５分しかない。

流石に入学式早々遅刻は勘弁だ。

「じゃあいってくるぞ」

「いってくるわ」

「うん。行ってらっしゃい」

さて、着きました教室。
ガラッといい音を立てて開く扉。
しかし、思い切り開け過ぎたのか扉がバンッと柱にぶつかる音が予想以上に響く。

「「「！？」」」

少々騒ついていた教室が水を打ったかのように静まりかえる。
三十人近くの人間に一気に見つめられて流石の俺も少々怯む。
しかし、それがいけなかった。

「ひっ！？」

どうやら怯んだ時の目がかなりの鋭さを持っていたようだ。
向こうからは睨まれたかの様に感じたのか全員がサッと顔を逸らす。

「はぁ……」

前に語ったと思うが俺はこの目つきの悪さ故に勘違いされやすい。
だからこの展開にまたか、と呆れるしかなかった。
とりあえず俺は黒板に貼られている紙を見て自分の席へと向かう。

座席は真ん中の列の一番後ろ。
とりあえず良しとしよう。

担任が入って来て軽く自己紹介をすると直ぐに体育館へと向かい入学式を行なった。

「はい。じゃあ皆には自己紹介をしてもらいます」

式も無事に終わり教室に戻ったら担任が自己紹介をしろと言い出した。

あ行から自己紹介をし、現在「お」。

「始めまして。僕はオリヴァルト＝レーヴェンと言います。これから一年間よろしくね」

俺はそいつの名前を聞いてつい笑ってしまった。

「？　君、何が面白いんだい？」

「いや、金髪に青と緑のオッドアイって……。あはははは！」

自己紹介する時もニコポッです。みたいに笑うんだぜ？　笑えるよ。

「何が面白いのかわからないが不愉快だ。直ぐにその口を閉じてくれないか」

「ああ、確かに失礼だったな。悪かった」
確か相手の事も考えずに笑うなんて失礼だよな。
うん。これからは心の中で笑ってよう。
「ふん。わかればいいんだ」
しかし気に入らないな。
あいつ自分が世界の中心みたいな風に考えてるのが感じられるよ。
まあ、こっちにいちゃもんをつけない限りどうでもいいがな。
そして自己紹介は進み……
「高町なのはです。仲良くしてくれるとうれしいです！」
魔王が現れた。
え？　自意識過剰野郎と魔王がいるクラスなの？
ヤバイ俺一年間おとなしくしてるよ。
そして自己紹介はまたまた進み俺の番が来た。
「火花紅次です。普通の人だけ仲良くしてください」
魔王とか自意識過剰野郎はいらない！
そして自己紹介は終わり帰る時間も迫って来たので担人が締めくくり帰る事にした。

「愚弟？　入学式はどうだった？」

家に帰りはやての家で夕飯を食べていたらあやねえが今日の感想を聞いて来た。

「クラスに魔王とナルシストがいた」

「なんやそれ。ホンマに小学校か？」

「そう……。何かあったらこの賢姉に言うのよ。私が相手を一族郎党社会的に抹殺してあげる！」

逆に不安しかないぞ。

とりあえず、これから学校生活がハードになりそうだ。

第４話　小学校入学式！　俺は一年間大人しくしてよう（後書き）

時が進むのが早いのは仕方が無い。
だってキンクリだもの。

最近ネタってどうやって考えつくのかわらなくなった。

部活で書いてる、兄「俺は妹の裸エプロンがみたい」って小説はネタがスラスラでるんだけどね

感想くれると嬉しいです。
てか無くて俺は鬱気味。

第5話　魔王とナルシストとそれまでと

小学校に入学し暫くが経った。

朝ははやてに見送られあやねえと一緒に学校へ行き、学校へ着くとクラスメイトには怖がられ、昼にはあやねえと屋上で飯を食い、放課後にはあやねえと家へ帰り、はやての家で飯を食い風呂に入り寝る。

それが俺の一日のサイクル。

しかし、この日は少し違った。

入学式から早一ヶ月。
あれだけ挙動不審と見間違えられても仕方が無い様子だったクラスメイト達も学校に慣れてきたようで、友達を作り特定のグループを作り出していた。

ちなみに俺はやはり怖がられて誰も近寄ってこない。

「おい、君」

暇なのでラノベを読んでいたらナルシストが話しかけて来た。
やめてくれ今いいところなんだ。
タカとソラが再開した場面なんだから。

「おい、聞いているのか」

やべえ。今までのクールだった夜空からちょっと恥ずかしがって頬を染めている夜空のギャップが可愛い。

「ほう、無視とはいい度胸だな」

はぁ、俺の感動を返せ。
お前のせいでラノベに集中出来ん。
少々不機嫌オーラが漏れ出ていたのか周りの生徒が逃げ出した。

「何のようだ……」

今なら視線だけで人を気絶させれそうだ。

「うっ、お、お前今日の体育の時間僕を笑っていただろう」

ああ。確かに。
なんだかサッカーでズバズバ敵を抜かすは良いがドヤ顔とかシュートを決めるごとに女子を見て笑いかけるのが滑稽でつい笑ってしまったな。

というよりも俺の事見てたのかよ。

「それがどうかしたか」

「ぐっ、なぜ笑っていた！」

こいつ……意外とヘタレだな。
なんだか教室がシリアスな空気に包まれだした。

いや、どこにシリアスがあったんだ？

とりあえず何か答えねば。
しかし滑稽だからと言えば傷つくだろうしな……。
あれ、嫌われてる奴に気づかい出来る俺ってかなり紳士じゃないかな？

とか思っていると、

「オリヴァルト君やめなよ」

魔王が降臨した。
俺は内心かなり焦っている。

何故奴が出てきた！？
まさかナルシストに代わってお仕置きよ！　とか言い出すつもりか！？
やめなよって言葉は自分がやるからやめなよって意味か！？
やべえ、魔王マジやべえ。

「オリヴァルト君がしてるのは唯の言いがかりだよ」

「けどなのは！」

なんだか喧嘩し出した。
てかナルシストと魔王ってファーストネームで呼び合う仲なのか。

あれ、じゃあナルシストも原作キャラ？
いや、あんなにキャラ濃かったら原作知らない俺でも知ってるだろ。

「う、分かったよ、なのは。今回は僕が引くよ。愛するなのはの頼みだものね」

愛するだって。小学生が何言ってんだか。ああ、俺も小学生だった。

しかし、愛してると言われた魔王は心底嫌そうな顔をしていた。

おい、ナルシスト嫌われてんじゃん。

睨みながら自分の席に帰っていくナルシスト。

とりあえず睨み返してみる。

すると顔を音が鳴りそうなぐらいのスピードで背けたナルシストがいた。

やっぱりヘタレだな。

いや、俺の目つきが怖いだけか？

まあ、いいや。

「ごめんね？　火花君」

魔王は自分の席に戻らず俺に謝罪して来た。

まさか、謝罪して油断させたところをズドンとかじゃないよな。

「オリヴァルト君ってちょっと思い込みが激しかったりするから」

「例えば自分達は相思相愛とか？」

「にゃはは……。私はあんまりそういうのまだわからないんだけどね。けどオリヴァルト君って幼馴染だけどそういう対象じゃないと思うんだよね」

てか、小学校一年生がする会話じゃないな。

「まお、じゃない。高町そろそろ次の授業が始まる。席についておけ」

「まお？　まあいいや、じゃあまた後でね！」

こちらを見ながら手を振って走り出す魔王。

あ、転んだ。

ｓｉｄｅ　なのは

オリヴァルト君と知り合ったのは幼稚園の頃でした。

家族の皆が大変だから邪魔しないように大人しく公園で遊んでいたらいつの間にか隣にいた。

金色の髪の毛に青と緑の瞳の男の子。

世間一般ではイケメンって呼ばれそうな顔。

だけど私は違和感を感じた。

何だかテレビで見るような整形している芸能人みたいな違和感。

けど整形してないみたいだし……。

その日から彼とは良く公園で遊ぶようになった。

とは言っても私が一人でいると向こうからよって来る感じだった。

うーん、今思い出しても不思議だなあ。

なんで今まで一緒に遊んでるんだろう。

あっ、私がどこに居ても向こうが知らないな内に隣りにいるからだ。

そんな彼がクラスメイトの火花君に迷惑をかけていた。
彼は良く勘違いや思い込みをして人に迷惑をかける。
その度に謝るなのはの気持ちも考えて欲しいな。

なんで彼は私の隣にいるのだろう。別に彼が言うように私は彼をこれっぽっちも愛してるわけでも無いし。むしろ苦手な部類だ。
うーん。謎だ。

あと、火花君に転んだところ見られて恥ずかしかったよぉ。
よし、今日はもう会わないでおこう。

side　紅次

あの後結局高町とは話さないまま帰ってきた。

「コウ。今日はどうやったん？」

もはや日課となっているはやてとあやねえに学校の出来事を語る作業を行う。

「今日はナルシストが絡んで来て、魔王が善人の皮を被って近づいて来た」

「はぁーナルシスト君ついには絡み出したんやなぁ」

ああ、そうだ。あいつのせいでラノベの続きが読めていない。

「魔王は運動神経が悪いみたいだった」

何もない所で転ぶのは運動神経云々じゃ無い気もするけど。

「とりあえずそのナルシーには社会的に抹殺して、魔王は本性を表してからね」

「あやねえやめてよ！？」

あやねえが過保護過ぎて困る……。

第5話　魔王とナルシストとそれまでと（後書き）

あれ、なのはが大人っぽい？

それよりもこいつら愛語ってるけど小学校一年生なんだぜ？

なのはとオリヴァルトの関係は好きでもないのに良く近寄ってくる友達みたいなもの。

感想頂けると嬉しいです。

第6話　あやねえはどんなに食べても太らない

翌日、半額弁当を巡るラノベを読んでいたらまたナルシストがやって来た。

「はぁ、何のようだ？」

紳士な俺は呆れながらも優しく対応する。

「おい、デュエルしろよ」

何故そうなるし。

「墓地の天使が４体のみだ！　大天使クリスティアを特殊召喚！効果でオネストをサルベージ！」

「奈落で」

「なにっ！？」

相手の手札はオネスト一枚さらには通常召喚を終えている。

「じゃあ俺のターンドロー」

フィールドは互いに激流葬でガラ空き。

勝ったな。

「ジャンク・シンクロを召喚。効果でボルト・ヘッジホッグを特殊召喚。シンクロでハイパー・ライブラリアン。ワンフォーワンで手札のダンディ・ライオンを捨ててデッキからグロー・アップバルブを特殊召喚。ダンディの効果でトークン二体。バルブとトークン一体でフォーミュラ。フォーミュラとライブラで二枚ドロー。墓地のダンディを除外しスポーアをレベル４で特集召喚。トークンとスポーアでカタストル。一枚ドロー。ライブラ、カタストル、フォーミュラでシューティング・クェーサードラゴン」

手札消費は三枚だけ。そこから三枚ドロー。まあまあかな。

「じゃあクェーサーで二回攻撃終わり」

「僕が負けただとっ！？」

まあ、はやての相手をしている内に自分も強くなったからな。

てかなんで勝負してるんだ？

訳が分からないが次の授業もはじまりそうなので席に着いた。

「名誉挽回だって」

次の休み時間に魔王が俺の席にやって来てナルシストが勝負を仕掛けて来た理由を教えてくれた。

「俺何かあいつの名誉傷つけたか？」

「オリヴァルト君思い込み激しいから」
つまり自意識過剰が発動したんだな。
「それでその自意識過剰君は何処に？」
休み時間何時もなら女子と話している奴の姿が無かった。
「さあ？　気づいたら良く居なくなってるから」
まあ、興味無いし別に良いが。
「ほら、もうチャイムが鳴るぞ、席に着いとけ。今日は転ぶなよ？」
「にゃ！？　転ばないよ！」
魔王は顔を赤く染めて席に戻っていた。

さあ、放課後だ。
あやねえとは校門で待ち合わせをしているので急いで向かう。
「おい、待てよ」
カバンを掴み教室を飛び出そうとした俺にナルシストが声を掛けて来た。
「あん？」

俺は早くあやねえのところに向かわねばならないんだが。

「お前、これで勝ったと思うなよ。今回はたまたま回りが悪かっただけなんだ！」

いや、カードの話とか別にいいし。

「話はそれだけか？　なら俺はもう行くが」

「ぐっ、それが勝者の余裕か？　ふんっ、まやかしの勝利に精々酔うがいい！」

うわぁ～、痛いな。

「それと最後に、なのはは渡さない」

いや、要らないし。

ナルシストは言いたい事を言って直ぐに何処かへと消えた。
自分勝手な奴だ。人との会話は一方通行じゃダメなんだぜ？

「あら愚弟どうかしたの？」

あやねえが校門から下足箱の俺の元へと歩いて来た。

「ナルシストが一方通行な会話をして消えた」

「じゃあとりあえずナルシーには消えてもらいましょうか」

「いやいや、何回も言ってるけどダメだからね」

「ふぅ……仕方ないわね」

俺の言葉に従ってくれたのかあやねえは校内に入ろうとしていた体を翻し校外へと歩いて行く。

「それで、今日はどんなことがあったの？」

「今日はナルシストがデュエルを仕掛けて来たからとりあえず返り討ちにしといた」

「ふふっ、良くやったわ。それでこそ私の弟よ」

そう言ってあやねえは俺の頭を撫で回し抱きしめて来る。

「んー」

あやねえはどさくさに紛れてキスをしようとしてくる。

「まあ、させないけどね」

あやねえの拘束から抜け出す。

「なんで逃げるのよ」

「いやいや姉に唇を許す弟が何処にいるのか」

「姉弟のスキンシップよ」

「あやねえのは洒落にならないよ？」
軽くとかじゃないからな。
「外国ではあいさつ見たいなものらしいわよ？」
「それでもここは日本だから」
節度とかはちゃんと守るべきだよな。
「あ、そう言えばはやてが帰りに夕飯の食材を買ってって言ってたわね」
確かに朝に言ってたな。
そして俺たちはスーパーへと寄った。

「ん？　あやねえ、何勝手にチョコいれてんの」
「あ、あら別にいいじゃない。誰かが困る訳じゃないんだし」
いや、俺が家計簿つけるのに困るんだが……
「ああ……お菓子が積まれて行く……」
お菓子でカゴ一つが埋まる……だと……！？

「あとこれとーこれとー」

ああなったあやねえは俺ですら止められない。
俺はただお菓子タワーが出来上がるのを見ている事しか出来なかった。

「なんでこんなにお菓子買っとんねん！」

両手で抱えきれない程のお菓子を頑張って家に持って帰るとはやてに怒られた。

俺は悪く無いぞ。

「あやねぇがお菓子買ったぐらいわかる。ただな？　せめて止めようや」

「いや、あやねえがお菓子買う時は止まらないし」

「やかましい！　死に物狂いで止めぇ」

そんな無茶な。

まあ確かにはやてが怒るのは頷ける。
お菓子だけで一万円札を使うなんて考えなかったからな。

まあ、とうのあやねえはと言うと素知らぬ顔でポッキィーを食べてるし。

「コウもあやねぇの事思うならちゃんと言った方がええで？」
ふっ、今まで何度言った事か……。
「コウ……」
はやては今までの勢いを失い、さっきとは打って変わり優しい顔で俺の頭を撫でる。
「苦労したんやな……わかってやれんくてゴメンな」
「いや、良いんだよ。俺、これからも頑張るから」
「コウ。これからは一緒に頑張ろ。一人で無理なら二人でや」
「はやて……」
「コウ……」
俺たちは言葉では言い表せない繋がりを感じてひしと抱き合う。
「なぁにこれぇ」
あやねえの声も俺たちには届かない。今なら何でも出来る気がする！
それから一ヶ月。
あやねえのお菓子を買う量は半分まで減らす事が出来た。
目指せ普通の量！

第6話　あやねえはどんなに食べても太らない（後書き）

あれ、何だか書いていたら当初の予定と違う様に……

あやねえはお菓子を大量に食べても全く体重が増えません。
ちなみに作者も大量に食べても比較的増えません（誰得情報）

感想や質問やストーリーとか番外編のネタも受け付けてます。貰えると嬉しく執筆の励みになります。

ではまた次回

第7話　またお前たちと同じか……

あやねえのお菓子の量を常人の三倍程度にするのに一年を費やした。

早い事にもう二年生だ。

「今年も一年間よろしくね！」

また魔王と同じクラスだった……。

「やあ、なのは。また一年間よろしくね。まあ、僕達は一年以上の付き合いだけどね」

ナルシストが妙に一年以上というところを強調して言って来た。だからどうした。

「あはは、オリヴァルト君も一年間よろしくね」

「一年間と言わずに一生でもいいんだよ？」

「うん、何言ってるかわかんないな」

魔王もナルシストも相変わらずだな。

「あんたも一緒だったのね」

ナルシストが一人でベラベラ話しているのを右から左へ聞き流していると二人の女生徒がやって来た。

「んあ？　アリサにすずかか」

金髪の少女はツンデレもといアリサ・バニングス。
紫の髪の意外と身体能力高めなのが月村すずか。
二人とも一年生の時になのはが行った魔王的事件解決法の被害者だ。
アリサがすずかを軽くいじめた時になのはが割って入り取っ組み合いの喧嘩で事件解決。
どこの青春ドラマだよ。
ちなみにナルシストは事が終わってから来た。
つくづく役にたたん奴だ。

「これからの一年間もよろしくね」

すずかは俺たちの中で俺を除けば唯一の常識人だろう。
何度すずかの常識さに救われた事だろう。

「まあ？　あんたが頼むんなら仲良くしてあげても良いわよ？」

「あ、じゃあいいです。さようならー」

「ちょっと！？　何でそうなるのよ！」

いや、別に仲良くしなくてもいいし。

「あ、あんたねー！」

「アリサちゃん落ち着いて。紅次君もからかわないでよ」

別にからかってはないんだがな。

「アリサ、怒った顔も可愛いけど僕は笑ってる君が好きだな」
いまだに何故かここにいるナルシストがアリサを口説く。
「は？　別にあんたに笑いかける必要あるの？」
「アリサちゃん、レーヴェン君は女の子には全員あんな接し方だから気にしちゃダメだよ」
すずか何気に酷いな。
俺たちが話していたらとりあえず時間になったので席に着き、去年と同じ事を繰り返す。
そしてまた自己紹介だ。
「オリヴァルト＝レーヴェンです。一年間よろしくね。それとそこにいる目つきの悪い不良が何か仕出かしたら僕に言ってね。助けてあげるから」
ナルシストは俺を指差しそう言う。
人に指差すとは教育がなってないな。
あれじゃあ周りの人間の品格を下げる事になるぞ。
ん？　あいつ良く俺のところに来るよな。
て事は俺の品格も下がってる！？
俺が驚愕の事実に絶望している間もナルシストはベラベラと俺の根も葉もない悪さや勘違いした自分の良さを語っている。
女子の大多数は熱い視線を送り、魔王などの少数の人間は「またか」といった視線を向けている。

「ちょっとあんた！　さっきから聞いてたらベラベラと嘘ばっかり言って！　確かにあいつは目つきも悪いし性格も最低で直ぐに人をからかう馬鹿だけど……あれ？　言って気づいたけど案外本当の事ばっかり？」

曲がった事が許せないアリサがナルシストに怒る。
しかしその言葉はフォローにもならないし逆に俺の立場が悪くなる。
この時アリサとナルシスト一人を除くクラスメイト全員の心が一つになる。

『この子意外と役に立たない！』

結局あの後有耶無耶になり自己紹介が終了した。

「アリサちゃん……。あれじゃあ紅次君の立場が逆に悪くなっちゃうよ。事実でもちゃんと上手くフォローしなくちゃ」

「ううっ、確かに迂闊だったわ」

学校が終わり下足箱までの道のりですずかが無自覚の毒を吐く。

「にゃはは。また今回も勘違いされちゃったね」

「誰のせいだ誰の」

あのまま行けば絶対クラスでの高感度急上昇間違いなしだったのに。

「確かに悪かったとは思ってるけどあんたの目つきが悪いせいよ！」
飛んだ言いがかりだな。
「まあいいよ、慣れてるし。じゃあまた明日な」
「バイバイ」
皆に別れを告げあやねえの元へ向かい家へと帰った。

「今日は一年前と同じ結果になった」
恒例のはやてへの学校生活の報告をする。
「ほんま、コウは勘違いされるなー」
「愚弟は昔から勘違いされるのよ。まあ、勘違いした人間は私が潰してたけど！」
好きでこんな目じゃないのに。
レイのせいにしとこう。
何処かで『理不尽な！』とか聞こえたが無視だ。
「まあ一年間で女の子の友達を三人も増やしたんやからクラスメイトに誤解って理解してもらえんのも直ぐやろ」
だといいがな。
しかしはやての言葉に棘があるような……。

「んふふ、わからないからあなたは愚弟なのよ」

ふむ、理解できなさそうだな。

第7話　またお前たちと同じか……（後書き）

ちなみにアリサやすずからの紅次に対する気持ちは仲の良い友達レベルです。

感想とかくれると励みになります

第8話　魔巣窟高町家。俺は勇者じゃないのに……（前書き）

何だか一番長い気が……

第8話　魔巣窟高町家。俺は勇者じゃないのに……

「君は妹の何なんだい？」

目の前には木刀を俺の首筋に添えているイケメンが。

添えて良いのは左手だけだぜ？

いや、そもそもどうしてこうなったし。

二年生になり暫くが過ぎた。

あれほど咲き誇っていた桜は虚しくも全てが散ってしまった。

そういえば花見に行った時にはやてが持ち出した酒で大変な事になったな……。

酔って見知らぬ美女の胸を揉みまくるはやて。車椅子から滑り落ちても這って来るはやては一種のトラウマ物だったな。

俺がそんな回想をしていると魔王が寄って来た。

「ねえねえ紅次君」

魔王はいつの間にか俺の事を紅次と呼ぶようになっていた。

俺は心の中では魔王で喋る時は高町って呼んでいる。

「明日ね、私の家に来て欲しいんだ」

明日は土曜日で学校が無い日だ。
しかし何故俺を誘う。

「実は……」

魔王の話を聞くと何故俺を家に招くか理解出来た。

どうやら魔王は明日、アリサとすずかと一緒に遊ぶらしいが、いつもの如くナルシストがやって来て自分も行くと言い出したらしい。

「お願い、君も来て！」

「いや、まだ死にたく無いし」

魔王の根城に行くなんてそれなんて勇者？
俺は世界半分くれるなら味方になる様な人間だぞ？

「死なないよ！？」

「酔ってる人間は酔ってないって言うんだ。それと一緒で信じて着いてけば死ぬに決まってる」

魔王城のメタキンを倒そうとウロついてたら逆に自分が倒されるって良くあると思う。

「紅次君は私の家を何だと思ってるの！？」

「え、言わせんなよ恥ずかしい」

「あ、ゴメン」
「魔王城だよ」
「恥ずかしい要素皆無だし、違うよ！？」
魔王はハァハァと荒い息をついている。
「おいおい教室の中で何興奮してんだ？」
「君が変な事ばっかり言うからだよ！」
おいおいついには責任転嫁し出したぞ。
流石魔王だな。
「じゃあ来てくれたらケーキ出してあげる」
なに？
「紅次君ケーキ好きでしょ？　それにお姉さんの分も出してあげる」
魔王は俺に姉がいる事を知っている。
とは言っても会った事は無いが。
「いくつ持って帰れる」
「４つなら」
「６つだ」

魔王は知らないがうちにははやても居るからな。

「うっ、お父さんに相談してみるの」

「結果が出たらメールしてくれ」

何故魔王が俺のアドレスを知っているかと言うと、何時の間にか魔王にアドレスを知られてそのままやり取りするようになったからだ。

喫茶店「翠屋」

市内でもかなり有名な場所で本格的なケーキやコーヒー、さらにはイケメンマスターに美人な奥さんとかなり有名な喫茶店だ。

昨夜魔王からメールが来て６つでもいいと言われたので俺はやって来た。

「お邪魔しまーす」

指定された午前１１時の３０分前に翠屋に到着。

「あ、紅次君ようこそ！　今日はありがとうね」

テーブルに座ってボーッとしていた魔王がこちらに気づき駆け寄って来た。

「別に高町が心配な訳じゃねーよ。ケーキが貰えるから来ただけだからな」

「それでもありがとう」
俺が感謝されていると厨房であると予想出来る場所からイケメン男性が出てきた。
雑誌で顔を見た事がある。
確かに高町士郎さんだ。
妻の高町桃子さんと一緒に喫茶店を経営している人だ。
しかし年齢と見た目が合わない気がする。
「やあ、いらっしゃい。僕は高町士郎。君は紅次君だね。なのはから聞いてるよ。なんでも目つきが悪いけど心優しい子だとか」
「お、お父さん！？」
魔王が士郎さんの言葉に反応して顔を赤くしている。
ほう、なかなかいい奴じゃないか。
これからは心の中でも高町と呼んでやろう。
「それで他の奴らはまだ来ていないのか？」
「うん。紅次君が一番乗りだよ」
「そうか。まあ適当に待つか」
やはり３０分前は早かったか？
そう思いながら近くのテーブルに座る。
すると士郎さんがスッとコーラを出してくれた。
「なのはが昨日君はコーヒーよりコーラの方が好きだと言っていて

ね」

確かに一年生の頃にそんな事を言った覚えがあるな。

「ありがとうございます」

士郎さんにお礼を言いコーラを一口飲む。

ペットボトルではなくビンのコーラの味がする。炭酸も抜けていなく、良く冷えていて美味しい。勿論ｚｅｒｏコーラじゃない。

そう言えば昔自販機でコーラを買おうとして間違えて隣のｚｅｒｏコーラを買ってしまったのは苦い思い出だ。炭酸は清々しい感じだったのに……。

高町と談笑する事１０分。

そろそろ誰か来るかな、と思っていると扉が開きカランコロンと鈴の音が響いた。

「お邪魔します」

やって来たのはナルシストだった。

「やあ、なのは今日も可愛いね」

「あはは、オリヴァルト君も相変わらずだね……」

先ほどまでニコニコしていた高町は苦笑いを浮かべて返事をする。

流石に不本意だとしても数年来の幼馴染なので軽く返している。

「ハハッ。今日も相変わらずかっこ良いなんて照れるな」
流石ナルシスト。思考もポジティブだな。
そんなやり取りをしているとまた士郎さんがグラスを持ってやって来た。
「はい、紅次君おかわりだよ。なのははオレンジジュースでいいね」
「あ、どうもありがとうございます」
喋っていたので喉が渇いてコーラは既に無かったので素直に嬉しい。
「お義父さんご無沙汰してます」
「うん。いらっしゃい。それと君にお義父さんなんて言われる筋合いはないね」
「あ、そうですね。まだ僕は１８歳じゃ無いでしね」
いや、年齢は関係無いだろ。
それからさらに２０分後。
すずかとアリサがやって来た。
「あんた達もう来てたのね」

「なんだか待たせちゃったみたいでゴメンね？」

「そんなに待ってないから気にするな」

一応相手を気遣い気にするなと言っておく。

「あのね！　紅次君が一番最初に来てくれたんだよ！　しかも３０分前から！」

高町……わざわざ時間まで言わなくていいだろ。相手が気にするかもしれないし。

「へ～。いつもはなのはの扱いが荒いくせにこういう時はしっかりしてるんだ」

高町は弄ると打てば返す鐘みたいに面白いからな。

そんな事で集まった俺たちは士郎さんが持って来てくれたサンドウィッチを食べながら喋る。

「なのはってばなんでそこの馬鹿といるの？」

ちなみに馬鹿とは俺の隣にいるナルシストの事だ。

「んー、わかんない。何処にいても気がついたら側にいるから」

「なのはちゃんそれってストーカーじゃ……」

「ハハッ、すずかは面白い事を言うね。僕となのはは愛し合ってるから互いに惹かれ合うんだよ」

「なのは。何かあったらすぐ言うのよ。助けになるから」

「にゃはは、大丈夫だと思うよ？」

ちなみにナルシストの言葉に誰もツッコミを入れないのは無駄だと分かっているからだ。

はやて直伝のツッコミをしたかったのにな……。

既に俺がここに来てから時計の分針は2、3回円を描いている。

適度にナルシストをスルーしながら談笑しているとら誰かがやって来た。

「ん？　なのは友達か？」

「あ、お兄ちゃん」

士郎さんに似た人は高町恭也と言うらしい。

「君はなのはが言っていた紅次君？」

「あ、はい」

返事をすると恭也さんは俺の事をジロジロと見てくる。

それはまるで何かを値踏みするかの様に感じる。

まさか男色家！？

「なんだか変な事を考えてないか？」

「イエベツニ」

危ない。もう少しで命がマッハで消えるところだった。
しかしこの雰囲気どこかで？

「ふむ」

何かしらの値踏みが終了したのか思案顔になる恭也さん。

そして、

「君は妹のなんだい？」

突然俺の首筋に木刀を添えて来た。

突然何だし。

「ふむ、特に驚いた素振りは無しか」

木刀を直し再び思案顔な恭也さん。
ああ、今のは驚いた方が良かったな。

「まあ合格かな。なのはをよろしく頼むよ」

そして何処かへと行く恭也さん。
俺たちは驚きで言葉も出ない。

すると今度は眼鏡の女の人がやって来た。

「恭ちゃんは相変わらずシスコンだねー」

「お姉ちゃん？」

なるほどあれはシスコンか。
ああ、雰囲気の正体はあやねえと同じだったんだ。
ブラコンな姉にシスコンな兄か……。
ますます高町と仲良くなれそうな気がする。

高町の姉の美由紀さんも何処かへと行き暫くが経った。

「そろそろ帰るよ」

はやてやあやねえが待ってそうなので帰る事にする。

「紅次君帰るの？」

「ああ。家族を待たせられないからな」

そう言うと高町は士郎さんを呼びに行った。

「はい、これ」

手渡される箱は明らかに６個以上の重みがあった。

「？　士郎さん？」

「それはお詫びだよ。恭也が迷惑をかけたようだからね」
ああ、成る程。
貰えるなら素直に貰っとくか。
「じゃあ今日はありがとうございました」
「ああ。また来るといいよ」
「また学校でね紅次君！」
二人に見送られ俺は帰路に着いた。

「ただいまー」
「おかえりなさい」
「おー、やっと帰って来よったか」
やはりあやねえもはやても待っていたようだ。
「それで例のブツは？」
「ん。オマケしてくれたよ」
「でかしたわ！　流石私の弟！」

あやねえは前から翠屋のケーキやシュークリームが食べたかったようだ。

「ほな、お茶入れよか」

「あ、手伝うよ」

はやてを手伝いに台所へ。
そして、お茶を入れケーキを食す。

「んー、美味しい」

「ホンマや。そこらの店が対した事ないみたいに感じるで」

二人は普段以上の笑顔を浮かべる。
喜んでくれたようで何よりだ。

今日は魔王から高町へジョブチェンジしたり高町家と知り合ったり色々あったが良い日だった。

ちなみにレイが自分もケーキが食べたかったと言って意地けるのは完全な余談だ。

第8話　魔巣窟高町家。俺は勇者じゃないのに……（後書き）

後半から眠たい中書いたから内容が薄くなった気が……

今日なんとなしに小説情報を見るといつもの倍以上色々と増えてた……

何があったし。

最近学校が再開したのに深夜まで小説を書いてるから完全に寝不足だ。

そろそろ無印ですねー

ハードモードの序章？

感想やご意見があれば遠慮せず恥ずかしがらずドシドシ書いてください

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3318ba/

リリカルマジカルハードモード

2012年1月14日02時45分発行